復興を願って ～東北 陸前高田を訪ねて～

訪問者／樽井佳代子議長　北川嗣雄市長

あれから７年と５カ月。約 60 世帯が暮らす竹駒町にある『滝の里工業団地 仮設住宅』を訪ね、被災した当時や現在の心境などをお伺いしました。（滝の里仮設住宅には気仙川河口西側に位置する**今泉地区**で暮らしていた方が多い）今泉地区は 3.11 の津波で、約 600 世帯が暮らしていた民家のほとんどが流失し、200 人以上の方が犠牲となりました。

今回は、津波の発生時の状況、避難所暮らし、仮設住宅の生活などについて伺いました。

避難所生活から仮設住宅での生活へ

自宅を流され、暮らす場所を失い、お寺や公民館などで避難生活を余儀なくされた。電気もないため、ロウソクで夜を過ごした。約１カ月は電話も使えなかった。避難してすぐの食事はおにぎりを数人で分けた。生活スペースを間仕切るダンボールなどもない。パンツを裏返してはいたり、お風呂にも入れない日が続く。日常生活ではあたりまえの洗顔、歯みがきすら十分にできない状況。清潔に保てないと、健康面にも間接的にダメージを与える弊害が起こる。プライバシーもない状況がいつまで続くのかと不安が募った。

地震から約３カ月経った６月６日に、仮設住宅へ入居することができた。鍵をもらった時は嬉しかったと、みんなが声を揃えて当時を振り返る。長年暮らした自宅とはまったく違うが、くつろげたり、米をとぎ 料理を作ることができることに感謝した。隣近所は以前とは違うが、仮設生活では疎遠にはならず、身近に感じてみんなと接することができる。

▲ 集まっていただいた 10 人の方からお話を伺いました。

生き残ったのは偶然

現在、滝の里の仮設住宅で暮らす植村たい子さん。３月 11 日の地震発生後、津波を警戒し一度は高台へ避難したが、家族の薬や孫のジャンパーを取りに家に戻りました。その時、『庭へ乗用車が波に流され突っ込んできたので、あわてて家の２階へ上がりました。ところが黒い海水が入水し、首から下が浸水しました。波が引くのを待っていましたが、家ごとプカプカと流されはじめました。その後、何度も波が押し寄せ、気を失いました。たまたま、家がひっかかり流されず、翌日、救助されました。』と当時を振り返りました。一度は高台に避難したが、自宅に「お金」「位牌」「服」などを取りに帰った時に犠牲になった方が多いと聞きました。植村さんは最後に『今、私が生きているのは、たまたまです。』と話しうつむきました。

二度と津波に負けない

滝の里仮設住宅自治会の会長を務める小野田髙志さんは、『地震発生直後に地元の小学校に足を運び、児童らに高台への避難を促しました。その後、ご近所の高齢者宅へ、避難してくださいと声をかけて回りましたが、何人かが亡くなりました。』と当時の状況を話されました。また、『目の前で流される人もいた。ロープがあればよかったが･･･。今でもその方の顔が忘れられない。』と唇をかみしめました。

最後に、小野田さんは『つくづく感じたのは、地震や津波の発生時に、家族内でどのように行動し、どの場所に集まるかを決めておくことは重要です。』と教えてくれました。

昨年４月誕生（かさ上げ地区）

集客の核となる大型商業施設**「アバッセたかた」**は市立図書館を併設整備し、来場者の相乗効果が期待できます。また、2020 年の春には同施設東側に文化会館が開館予定。（ホールは 600 席以上）